

第4回 いけしま ふくまん じ いせき 池島・福万寺遺跡 現地説明会

1991. 11. 30.

(財)大阪文化財センター

はじめに

池島・福万寺遺跡は八尾市と東大阪市にまたがる大きな遺跡で、これまで治水緑地建設にともなう発掘調査でいろいろなことがわかってきています。まず弥生時代にはこの遺跡は水田として利用されていました。次の古墳時代には、人々がこの遺跡に住むようになり、家のあとやこのムラで作っていた土器などがたくさん見つかっています。平安時代には大きな正方形の水田がつくれるようになり、その後現在までこの遺跡では人々がお米や綿などをつくってきました。

このたびこの遺跡から弥生時代終わりごろの木製導水管と古墳時代の始めごろに捨てられた鏡が見つかりました。どちらもこの地域の歴史を考えるうえでとても大切な発見ですので今回現地公開を実施することになりました。



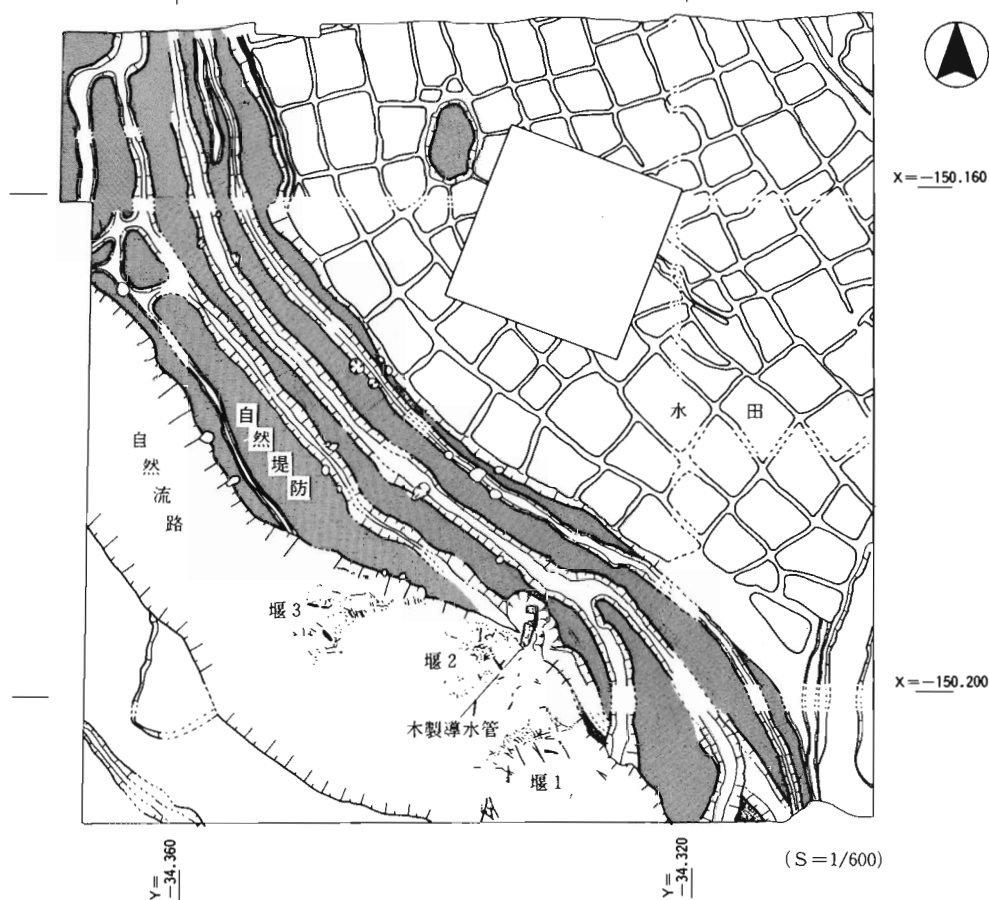
木製導水管

弥生～古墳時代の池島・福万寺遺跡

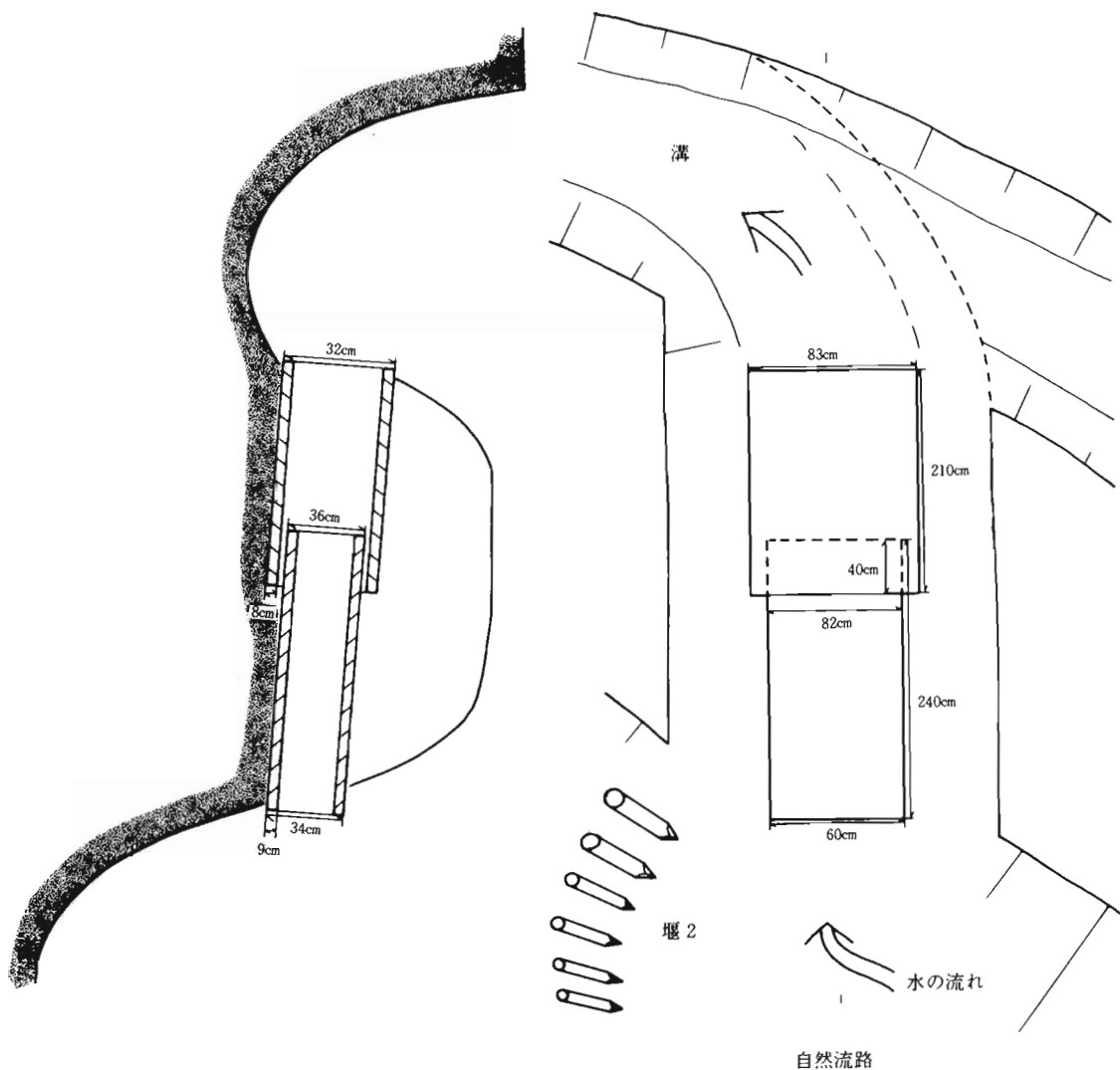
木製導水管がつくられたり、鏡が捨てられた弥生時代の終わりから古墳時代の始め頃、池島・

福万寺遺跡はどんな様子だったのでしょうか。まず弥生時代の様子からみてみましょう。これまで調査された部分では、水田が一面にみつまっていることから近くのムラに住んでいた人々がここでお米を作っていたことがわかります。水田以外には川のあともみつかり、お米を作るのに必要な水を川から水田に引く部分に木製導水管が使われています。

水を得るのに必要な川も洪水の時は恐ろしい川だったようです。弥生時代の水田も大洪水によって、砂で埋まってしまいました。そして厚くたまった砂の上が次の古墳時代には新しい地面となつて、そこに掘られた穴の中に鏡は捨てられていました。同じ時代の遺構は他にはほとんど見つかりませんから人々が住んでいたところがどこだったかはまだわかりません。しかしこれからの調査でそのようなこともわかってくるかもしれません。



弥生時代終わり頃の水田



木製導水管模式図

もくせいどうすいかん 木製導水管について

木製導水管は現代でも見られるような田んぼへ水を入れるための用水路^{ようすいろ}の一部です。現在は全体にフタをしてあるものを見かけますが、この用水路は川からの水の取り入れ口の部分にだけ立派な施設^{りっぺん}を作っています。これは洪水^{こうずい}の時に用水路がこわれて田んぼが埋^うまらないようにするためのくふうだったのでしょう。

全体の形は大きな木を2本くりぬいて、それをさしこんで置いたあとに土をかけて埋めもどしています。長さは4 m10cm、太いところで直径は83cmもあります。木の種類は北側がヤナギ、南側はアカガシという堅^{かた}い木を使っています。ヤナギの一部とアカガシの木の内側は黒くこげているので焼^やいてくりぬいたのかもしれない。

もくせいどうすいかん
木製導水管



せつごうぶぶん
接合部分



みなみがわくちぶぶん
南側小口部分

木製導水管と堰（せき）

木製導水管は川と、川の水を水田まで引くための溝（用水路）をつなぐ部分に使用されています。用水路にはたくさんの水を流す必要がありますから川の中には水をためるための堰がつくられています。堰とは現在のダムのようなもので、大小さまざまな杭を川の底に打ち込んで水の流れを堰き止めています。

木製導水管が最初につくられた時には堰2を利用して水を送っていたようです。ところが木製導水管と堰2はたびたび襲った洪水によってつぶされてしまったらしく、導水管の中には泥や砂がいっぱいつまっています。弥生時代の人々が苦心してつくった導水管も自然の力には勝つことができなかったのでしょう。

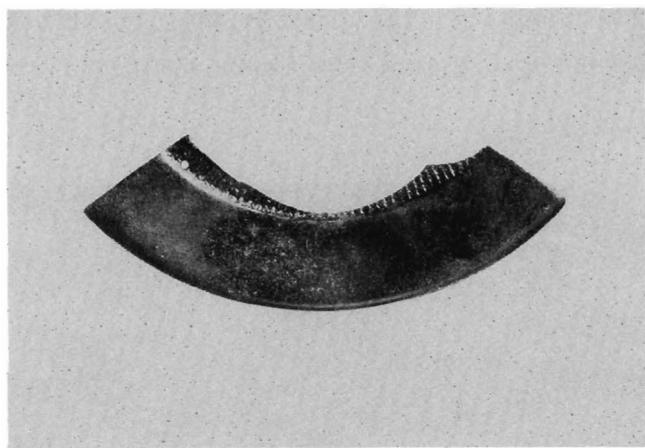
導水管と堰2がつぶされたあとも水田には水を引かなくてはなりません。だから新しく堰1と堰3がつけられました。この二つの堰でためられた水は今度は導水管を使わずに用水路へ送られたらしく、川の少し上流に口を開ける素掘りの溝がもともとあった導水管の溝のうえから掘り直されている様子もわかっています。弥生時代の人々の水田へ水を引くための苦勞が目に見えそうです。



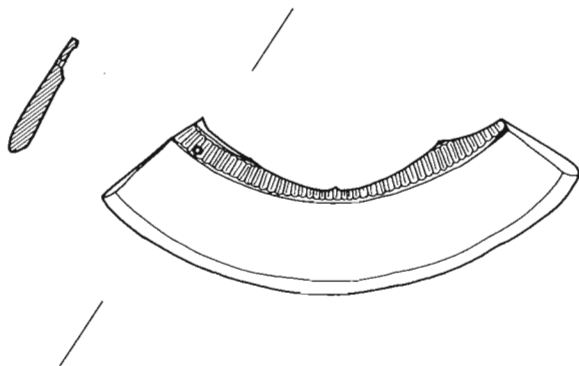
川と堰



けんすいきょうしゅつどじょうきょう
懸垂鏡出土状況



けんすいきょう
懸垂鏡



けんすいきょうじつぞくず じつぶつだい
懸垂鏡実測図 (実物大)

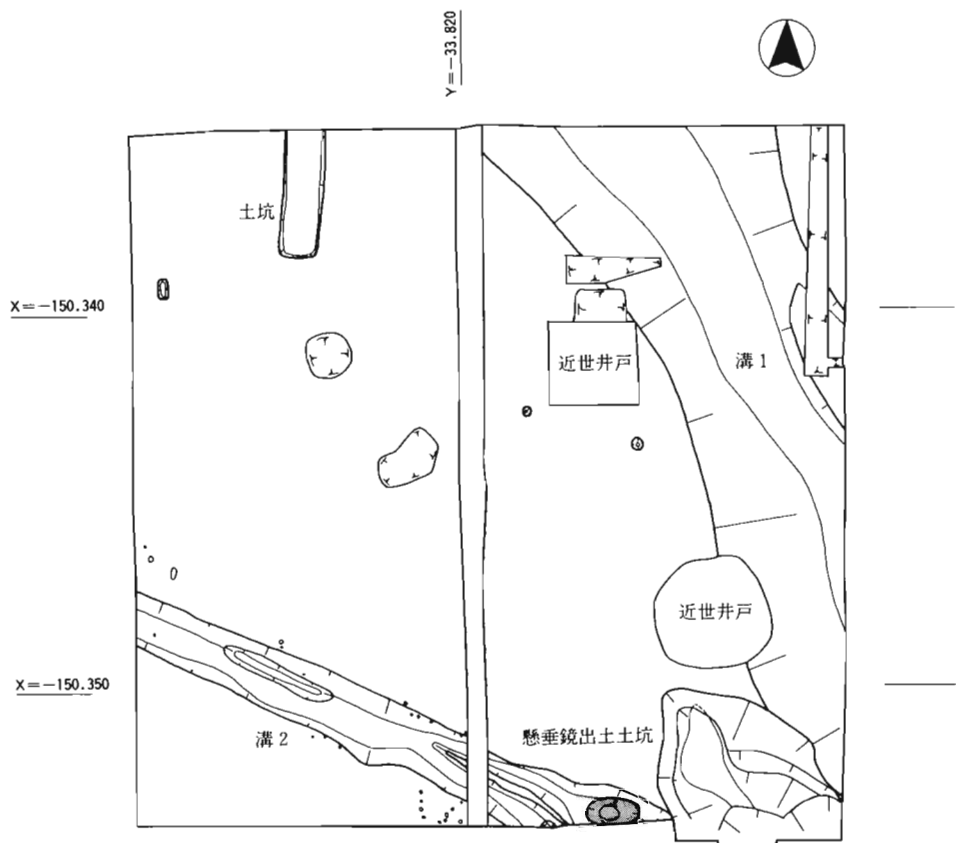
けんすいきょう 懸垂鏡について

木製導水管が出土したところから東へ約600mの地点から、古墳時代のはじめ(1600年前ころ)に掘られた土坑(地面に掘られた穴)の中にすてられた鏡の破片が出土しました。

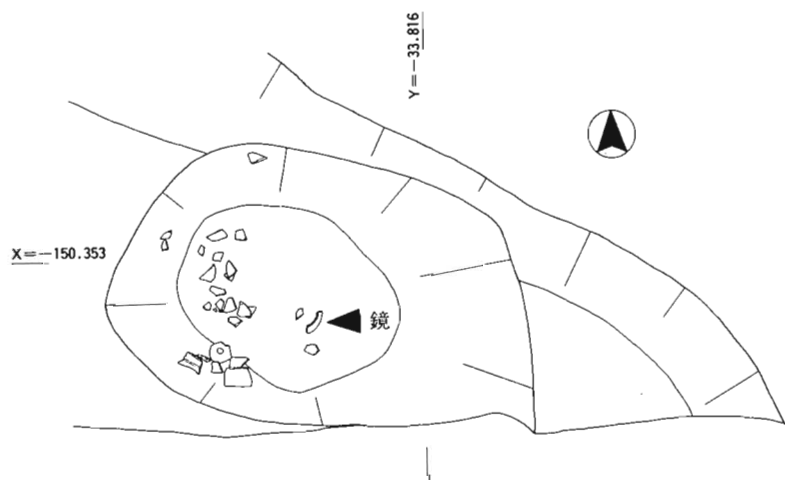
土坑はあとから掘られた溝に上のほうをこわされていましたが、鏡は土坑のいちばん底にありました。この土坑からは鏡のほか、ほかの地域(東海地方)でつくられた土器の破片や、桃の種なども出土しました。

鏡の大きさは、直径が8.9cm、厚さは1~2.5mmですが、全体のほぼ4分の1しかなく、しかも鏡のまんなかの部分も残っていません。ただしこの鏡は全体にまめつが見られます。また、この鏡の端には直径1mmの小さな孔が1個あけられており、そこにひもととしてペンダントのように首からぶらさげて使ったと思われます。このように利用した鏡の破片を懸垂鏡といいます。

懸垂鏡が遺構にともなって出土するのはめずらしく、また、すてられた時期のわかるたいへん重要な資料です。この池島・福万寺遺跡から出土した懸垂鏡は近畿では11例目です。また、全国でも50例あまりみつかっていますが、その多くは九州にみられます。



こふん ぜんき いこうへいめんず
古墳時代前期遺構平面図 (S=1/100)



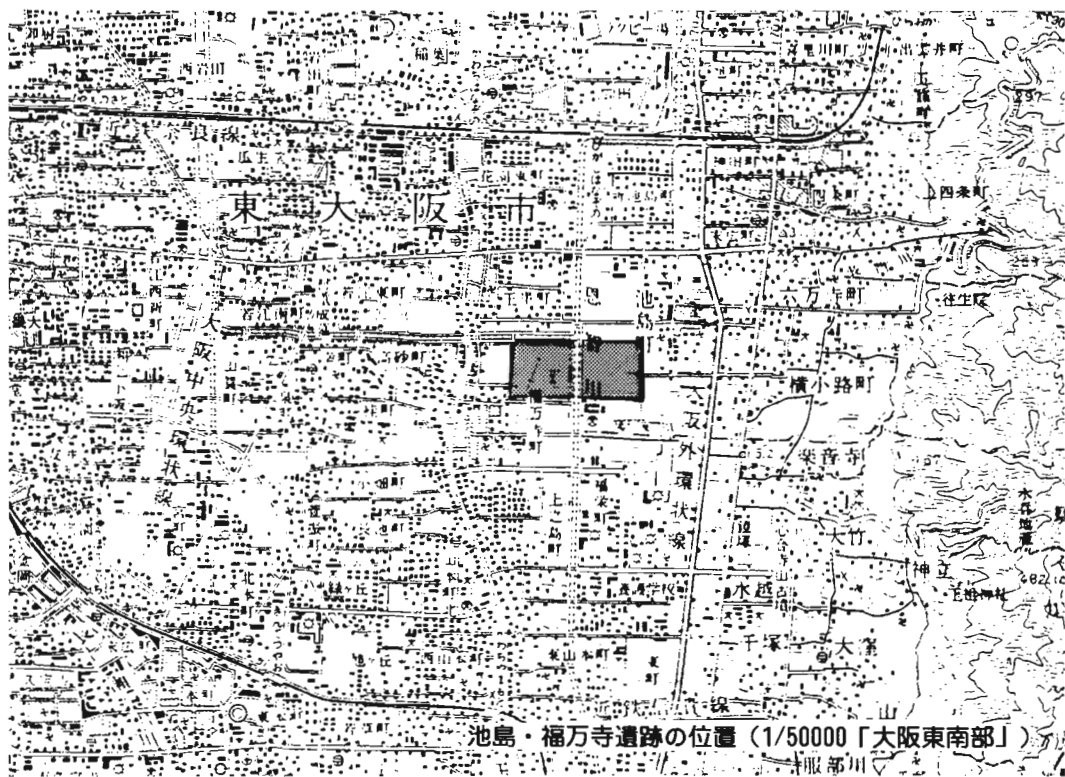
けんすいきょうしゅつどとこうへいめんず
懸垂鏡出土土坑平面図 (S=1/20)

まとめ

今回見つかった木製導水管や鏡についてわかったことをまとめてみましょう。

まず木製導水管についてはこれまで弥生時代の水田にこのような大規模な導水施設が用いられた例はみつかっておらず、我が国における水田稲作の初期の段階から水田への水の取り入れが大切なものであって、そのために大きな労力を費やしていたことがあきらかになった点は重要な調査成果であるといえます。また弥生時代の木材加工技術についても知ることができました。

一方、鏡については、その頃宝物として扱われていた鏡を持つことのできる人が池島・福万寺遺跡のムラに住んでいたことや、鏡が割れたあともペンダントにして大切に使われていたことがわかりました。ところが鏡が穴の中に捨てられていたことは、古墳時代になってそれまで宝物であった鏡が大切なものではなくなったことも考えられ、当時の世の中の変化を知るうえで重要な調査成果であるといえます。



池島・福万寺遺跡 第4回現地説明会資料

1991年11月30日

編集・発行 (財)大阪文化財センター

〒536 大阪市城東区蒲生2丁目10-28

TEL 06-934-6651

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所